

深夜の印刷工房で版画  
職人にインクまみれの  
手で押さえつけられた  
美大生が刷り台の上で  
動けないまま三回中出  
しされてインクの匂い  
ごと雌に刷り込まれる  
話

「動くな」

背後から降ってきた低い声に、湊の肩がびくりと跳ねた。

刷り台のステンレスに両手をついた前傾姿勢。腰をインクまみれの大きな手で鷲掴みにされている。黒瀬の指が腰骨に食い込んで、ツナギの生地越しに骨格ごと固定されていた。

「黒瀬さん、もう大丈夫で——」

「まだ版がずれてる。動くな」

工房の蛍光灯が一行だけ点いている。刷り台の周囲だけが白く浮かんで、棚のインク缶も壁際のスキージも全部影の中。換気扇の低い唸りと、二人分の呼吸だけが響く。

黒瀬の胸板が背中に触れた。

「ひっ……」

(近い。近すぎる)

版の位置合わせで背後に立つのはいつものこと。でも今夜は触れ方が違った。腰を掴む力が、作業に必要な強さを明らかに超えている。

「ここ、インクがついてる」

黒瀬の右手がツナギの腰紐を掠め、脇腹に滑った。親指の腹が素肌に触れる。タンクトップの裾がめくれて、インクの冷たさと指の体温が同時に皮膚を刺した。

「あ……っ、冷た……」

「動くなと言った」

低く、静かな声。スキージーを握る時と同じトーンで命じられると、身体が勝手に従ってしまう。半年間、この男の指示に従って版を刷り続けた身体が。

左手がタンクトップの裾をさらに持ち上げた。汗ばんだ背中  
中の肌を、インクの残った指先がゆっくりと辿る。腰椎のく  
ぼみに沿って、一椎骨ずつ確かめるように。

「やめ……っ、くすぐったい、です……っ」

「インクの匂いがする」

首筋に鼻先が近づく。吐息が産毛を撫でて、鳥肌が脊髄を  
駆け上がった。

——ぱさり。

ツナギの結び目が解かれて、作業着がずるりと腿まで落ち  
る。

「な……っ」

ボクサーパンツとタンクトップだけ。空調のない工場の空  
気が素肌を撫でて、太腿に粟粒が立つ。

「あの、黒瀬さん、何して——」

振り向こうとした首の後ろを掴まれた。インクの手。頬が  
ステンレスの天板に押しつけられて、冷たさに息を呑む。

「版がずれるから。動くな」

黒瀬の左手がボクサーパンツの上から尻に触れた。掌の熱  
が布一枚を通して、じわりと臀筋に染みる。

「ちが……これ、作業じゃ——」

太腿の内側に黒瀬の膝が割り込んだ。脚を開かされる。

パンツの布地越しに、指先がカントの割れ目を上からゆっくりと撫で下ろした。

「——ッ♡」

(嘘だ。嘘だ嘘だ嘘だ)

声にならない叫びが喉の奥で潰れた。カントを触られた。男の指で。布越しに。中心を縦になぞられただけで、頭の芯がちかっと明滅する。

「ここ。温かい」

黒瀬の声がいつもと違っていた。寡黙な職人の声に、初めて熱がこもっている。

「……ずっと、気になってた」

ボクサーパンツがずり下ろされた。

「あ、あぁっ……やだ、やめ——♡♡」

布地が太腿の半ばまで落ちた瞬間、工房の空気がカントの粘膜に直接触れた。ぞわりと腰が震える。外気に晒されたそこがひくりと収縮して——その反応すら黒瀬に見られていると思うと、視界が白く弾けた。

黒瀬の膝が太腿の間に入ったまま、閉じられない。刷り台に上半身を押しつけられ、尻だけを突き出した格好でカントを剥き出しにされている。

(こんな——こんな格好、男がするもんじゃ……っ)

男としてのプライドが叫ぶ。でも身体は別のことを叫んでいた。黒瀬の指がカントに近い空気を掻き分けるだけで、粘膜がじわりと熱を帯びていく。

「汚すぞ」

黒瀬が自分のインクまみれの指先を見つめて、それだけ言った。

次の瞬間、インクの残った親指がカントの外唇にぴたりと触れた。

「ひうっ……♡♡ つ、冷た——ッ♡♡」

インクの冷たさが粘膜を刺す。同時に指の体温が、じわ、と芯に沁みてくる。冷たいのに熱い。矛盾した感覚に頭が追いつかない。

黒瀬の親指がゆっくりとカントの外唇を割り開いた。内側の淡い桃色の粘膜に、黒いインクの筋がすうっと引かれていく。

「……綺麗だ」

版画を見る目だった。刷り上がりの紙面を検品する時と同じ、真剣で、冷静で、でもどこか恍惚とした目。その目が今、湊のカントに注がれている。

(やだ……そんな目で見ないで……っ♡)

「黒瀬さん、やめてください……汚い、インクが——っ♡♡」

「お前はいつもインクまみれだろ。今更だ」

中指の先がカントの入り口をくるくると円を描いた。入り口の皺に沿ってインクの黒がにじむ。粘膜の熱で指先のインクが溶けて、蜜と混ざってぬるりとした感触に変わっていく。

指の腹が花芽に触れた。

「ふぁ……ッ♡♡」

「声、出していい。防音だから」

黒瀬が花芽を指の腹で転がし始めた。インクと蜜が混ざったぬめりが摩擦を滑らかにして、粘膜への刺激がじかに響く。くにくにと軽く押し潰されるたびに、腰の奥から甘い電流が背骨を這い上がる。

もう一方の手が太腿の内側を撫で上げた。付け根の柔らかい肌をゆっくり往復して、カントのすぐ横を掠めて——でも絶対に触れない。

「んっ……う、あ……やだ……っ♡♡」

（感じてる。男のくせに。男の指でカントを弄られて——感じてる）

認めたくなかった。このカントのせいで、ずっと男になれなかった。触ったこともなかった。見ないようにしてきた。なのに今、黒瀬の手で暴かれて——本人の意思なんか無視して、じわじわと濡れ始めている。

「嫌です……こんなの……やめ——ッ♡」

「嫌ならカントが泣くのか」

黒瀬の指が蜜を掬い上げた。インクの黒と透明な蜜が指先で混ざって、とろりと糸を引く。

「……お前のここは、嫌がってない」

中指がカントの入り口に先端を沈めた。

「あ——ッ♡♡」

第一関節が入る。処女のカントは指一本でもきつくて、内壁が異物を押し返そうと痙攣する。でも同時に、粘膜が指にぴたりと吸いついて離さない。

「きつい。……力、抜け」

「む、無理です……っ♡指、太い……っ♡♡」

黒瀬の指は太くて長い。版を刷る手。スキージーを何千回と引いてきた手。その指が今、湊のカントの中にいる。

第二関節まで沈んだ。内壁のひだが指の関節に引っかかって、そのたびに火花みたいな刺激が走る。

指が中で曲がった。浅いところの壁を探るように指先が動いて——

ざらりとした場所に触れた。

「ひあ——ッ♡♡♡」

腰が跳ねた。刷り台に両手をつく指が滑って、ステンレスの天板を爪が引っ搔く。

「ここか」

「あっ……そこっ、なんか変……っ♡ やだ、黒瀬さんっ、そこ触らないでっ♡♡」

触らないで、と言いながらカントが指をきゅうっと締めている。自分の身体の裏切りに涙がにじんだ。

黒瀬はその場所を重点的に指の腹でこすり始めた。ゆっくりと、丁寧に、版のインクを均す手つきで。じわじわとカントの奥から蜜が溢れて、ぬちゃ……ぬちゃ……と指の音が工房に響く。

(音。聞こえてる。自分のカントの音が——こんなにいやらしい音がしてるのが——っ♡♡)

「ん……っ♡ うんっ♡ あっ……やだ、なんで……気持ちいい……っ♡♡」

二本目の指が入り口に触れた。

「いたっ……痛い、もう無理です、抜いて——ッ♡」

「すぐ慣れる」

二本の指がカントの中をゆっくりと押し広げた。肉が軋む。裂けそうな圧迫感に目の端から涙がこぼれる。でも黒瀬の親指が同時に花芽を擦って、痛みと快感が衝突して、頭の中がぐちゃぐちゃになった。

「う……あっ……やだ、気持ちいいのか痛いのか分かんない……っ♡♡」



「両方だろ。初めてはそういうもんだ」

二本の指が中を往復し始めた。じゅぷ、じゅぷ、と蜜がインクと混ざって指の根元を汚す。黒瀬の手首まで、黒と透明が入り混じった液体が伝い落ちた。

三本目。

「ああっ……♡♡♡ お、おくっ……指、三本も……っ♡♡ おくに当たって……っ♡♡♡」

もう抵抗する力は残っていなかった。カントがぐちゅぐちゅに濡れて、指の出入りのたびに入り口に白い泡が溜まる。子宮口の手前を指先がこつ、こつ、と叩くたびに、視界がちかちかと白く飛んだ。

「あっ♡♡ あああっ♡♡♡ こわれっ——♡♡」

全身がかくかくと痙攣して、刷り台にしがみつきながら最初の絶頂がきた。カントが指を締め付けてびくびくと脈打ち、透明な蜜がどろりと指の間からこぼれ落ちて、刷り台のステンレスに滴る。

（イッた。男なのに。カントで。黒瀬さんの指で——イッチやった……♡♡♡）

絶頂の余韻で全身から力が抜けた湊を、黒瀬がぐるりと反転させた。仰向けに刷り台の上に転がされ、脚を持ち上げられる。頭上の蛍光灯が眩しい。

初めて正面から黒瀬の顔を見た。

いつもの無表情が崩れていた。目が据わっている。瞳孔が開いている。インクで汚れた手が黒いエプロンの紐を解いて、作業着のベルトに手をかけた。カチャリ、と金属音。

「あ……」

ベルトが外れて、ジッパーが下がって——

「む、無理です……っ♡♡」

見た瞬間、身体が固まった。指三本で限界だったのに、それより明らかに太い。長い。血管が浮き出て、先端が湊の視線を受けてびくりと跳ねた。

「入らないです、絶対入らない……っ♡♡」

「入る」

黒瀬が湊の膝裏を両手で抱え上げた。カントが完全に晒される。指で犯された後のカントは入り口が少しだけぽっかりと開いていて、中の桃色の粘膜にインクの黒が筋になって残っていた。

「お前のここが、そう作ってある」

先端がカントの入り口に押し当てられる。蜜とインクでぬるぬるに滑る先端が、少しずつ肉を押し開いた。

「い——ッ♡♡ あ……っ♡♡ 裂けっ、裂ける……っ♡♡」

先端が入っただけで背中が弓なりに反った。指とは比べものにならない太さがカントの入り口を限界まで押し広げている。